「平成29年度特別企画展 毒と薬は紙一重」について

泉川康博・木原靖正

はじめに

植物公園では、年に1度、自主企画の特別企画展を開催している。テーマは毎年変えており、「被爆樹木」や「宮島の植物」といった、節目の年に開催するもののほかは、毎回、ゼロからテーマを探し出している。

植物公園では、植物の実物展示を主体にした「薬用植物展」を毎年開催しているが、過去に植物の「毒」について真正面から取り上げた企画がなかった。この機会に、植物が含有する生理活性物質の毒性と効能、すなわち「毒」と「薬」の表裏一体性についてまとめてみると面白いのではないかと思い、本展を企画し、2017年9月30日から11月30日まで開催した。

広報について

約2ヶ月間に渡る展示会ということで、両面カラー刷りのチラシを17,000枚作製し、市内の公共施設や中国地方の類似集客施設などに配布した。またホームページのトップページにバナーを設置し、チラシの電子版を掲載した。また、市民と市政2017年9月15日号にて展示会の告知を行った。

チラシ・入口看板のデザインについて

チラシと看板を、デザインの段階から別々の業者に発注すると、異なるデザインでの仕上がりとなり、統一感を欠くことになる。実際、2015年度の「広島市の被爆樹木」では、そのようになった。この反省から、2016年度の「宮島の植物」、今回の「毒と薬は紙一重」では、チラシデザインを内製し、チラシは完成原稿のpdf版を印刷業者にweb入稿、入口看板はワード原稿と写真の原板を制作会社に入稿し、チラシデザインと相違ないように仕上げるように依頼することで、チラシとの統一感がとれたものになった（写真1）。

写真1　入口看板

協力者について

薬用植物を多数扱うことから、企画当初から講演会の演者として、広島県の薬用植物の権威である、広島国際大学の神田博史教授に講演会の講師をお願いした。また、展示パネル作製にあたりさまざまなアドバイスをいただくとともに、その内容のチェックや展示品の生薬の提供もお願いした。

ボタニカルアートの展示について

NHK文化センター広島ボタニカルアート教室（代表：井本小夜）様の御協力をいただき、毒や薬になる植物のボタニカルアート6名18点を出展していただいた（写真2）。本展は室内の長期展示のため、実物の植物の鉢展示が可能な種類が限られてしまう。また、写真パネルや文字だけでは退屈な展示となってしまうが、美しいボタニカルアートが入ることで、実際の植物をイメージすることができ、また格調高い展示造作とすることができた。ボタニカルアートは、該当する植物種の写真パネルや解説パネルのすぐ隣に配置することで、解説との関連性を持たせることとした。

写真２　ボタニカルアートの展示

パネルの内容について

「毒」というと、なにかおどろおどろしい、日常からかけ離れたものを想像する方も多いと思われたので、本展ではふだん見かける機会の少ない植物の話題はなるべく避けて、家庭の庭でよく栽培される園芸植物や、野菜や果物として広く流通している作物などに潜む毒を多くとりあげ、毒が身近な話題であることを意識していただくようにした。

また、近年処方薬の無計画な投与、健康食品やサプリメントの過剰摂取による被害が後を絶たないことから、「薬も過ぎれば毒」のことわざのとおり、毒と薬の表裏一体性を分かりやすく理解していただくよう、工夫をこらした。

パネルは他館の解説展示などを参考に、章立てすることにした（写真３）。五章に分け、それぞれの章のテーマごとに解説し、その他の雑学的な話題は四つのトピックスにし、計34枚のパネルにまとめた。また個別の植物種の解説を16枚のミニパネルとした。

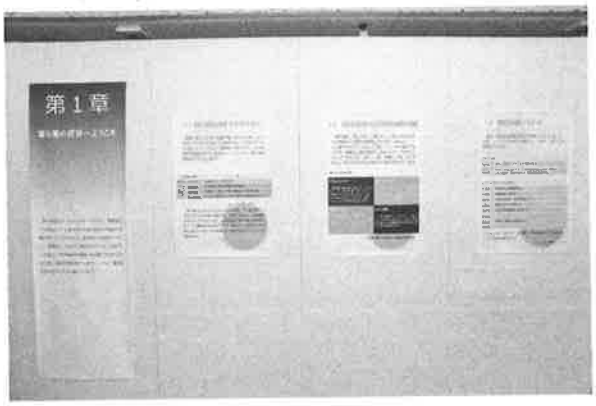

写真３　章立てにしたパネル展示

実物展示について

毒物を展示することは安全面から難しく、また実物の植物の鉢展示も、屋内展示であることから可能な種類が限られた。あいまいな基準ではあるが、強毒であっても園芸的に普通に栽培されている植物で、屋内栽培にある程度耐性がある種類であれば、展示することとした。その結果、期間中に展示できた植物種は、イヌサフラン（コルチカム）、サフラン、ニホンスイセン、ニラ、チョウセンアサガオ（ダチュラ）、トウゴマ、ジギタリス、コーヒーノキであった。

写真４　イヌサフラン（コルチカム）の鉢植え開花株と土を使わない卓上開花株の展示

鍵がかけられるショーケースでは、杏仁（モモの種子）、桃仁（アンズの種子）、ロートコン（ハシリドコロの根茎）、牽牛子（アサガオの種子）の４種の生薬を展示した。麻薬性のものや致死性の生薬の展示は見合わせた。

企画展コラボメニューについて

展示をご覧いただいた入園者にプラスアルファで楽しんでいただける工夫として、特別企画展に連動したコラボメニュー「豆腐野菜ハンバーグと選べる薬膳粥」を、展示期間中に園内のレストランにて提供することとした（写真５）。

このメニューにある薬膳粥は、講演会の講師を依頼した神田教授と民間企業が共同開発したもので、黒（黒米粥）、緑（緑豆粥）、黄（南瓜粥）、白（豆乳粥）、赤（小豆粥）の5種類からいずれかを選べる。

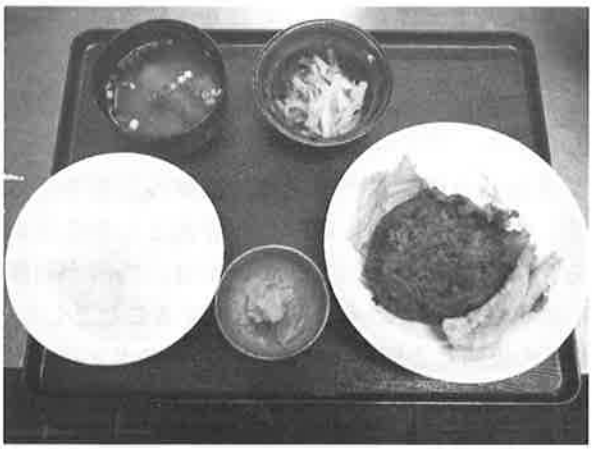

写真5　豆腐野菜ハンバーグと選べる薬膳粥

講演会について

10月28日（土）に、神田教授を招聘し、13時30分から講演会を開催した（写真6）。先生には、事前に企画展のタイトルにこだわりすぎることなく、食や健康に関する話題提供をお願いしたところ、「笑薬に勝る良薬なし - 健康食品の光と影」というタイトルでの講演となった。あいにくの雨天により客足が心配されたが、73名もの方が聴講された。軽妙な語り口で、参加者は引き込まれるように聞き入っていた。終了後、数名の参加者から活発な質問があった。

写真6　神田博史先生による講演会

総括

開催期間中の開園日は56日、総入園者数は、26,715人であった。2016年度の「宮島の植物」は67日間で56,700人であった。「宮島の植物」では夜間開園で多くの入園者が見込める12月（10月1日～12月23日）までの開催期間であったのに対して、今回は11月30日で展示終了としたため、入園者の大幅減となった。

一方、講演会の参加者数は、当日が雨であったにもかかわらず、73名の参加と盛況であったが、これは近年の健康志向の高まりに加え、神田教授の知名度や人気によるところが大きい。

「毒」や「薬」を扱うテーマであることから、展示品やパネルの内容の正確さや表現については、例年以上に気を使った。展示品が全体的に少ない、「世界最強の毒草」など、人目を引きそうな展示が無い、などの意見もいただいたが、植物公園として出来ること、出来ないことを線引きした結果、抑制的な内容となった。

アンケートは取らなかったので、展示の感想を聞く機会は限られてしまったが、毒があったり薬になったりする植物が身近にあること、それらの毒性について正しく怖がり、また安易に用いたりしないことなどはうまく伝えることが出来たのではないかと思う。